

いっ けん は ご いた

一間羽子板

初めて正月を迎える男の子には破魔矢と弓、女の子には羽子板を贈り、健やかな成長を願う風習がありますが、八代地方では、昭和30年代頃まで一間羽子板と呼ばれる大きな羽子板が贈られていました。

親戚や知人から贈られた羽子板は、床の間に飾り、子供が結婚する時、針箱や下駄箱に作り変えて嫁入り道具の一つとして持たせたといひます。

※一間は約1.8m。羽子板は材木を縦に伐ったものを使いますので、大きさは様々でした。「一間」は、一間もあるほど大きいという意味で使われたのでしょう。

羽子板の主な材料は、モミの木(杉も使われた)です。その上に下地を塗るなどして松竹梅や鶴亀などおめでたい絵柄を一気に描きます。その後、オキアゲと呼ばれる押し絵を中央につけたものが一間羽子板のオーソドックスな形です。赤のエナメル絵の具で下地を塗って絵を描いた羽子板は、戦後作られるようになったものです。



←白く塗った下地に松や梅などおめでたい絵柄の上にオキアゲ（押し絵）の付いたオーソドックスな形です
(昭和30年頃のもの)



一間羽子板で作った針箱

エナメルで模様を描いた羽子板。⇒
戦後作られる
ようになりました。



一間羽子板製作の様子



エナメルで描いているところ